

研修旅行の作り方 <その6>

まとめ - 研修旅行の価値 -

本シリーズを通して、国際耕種なりの研修旅行および見学への考え方と具体的な取組みを紹介してきた。我々はより良い研修旅行を作るため、試行錯誤し、時には失敗もした。しかし揺るがない視点は「如何に研修員に満足してもらえるか」である。研修旅行もしくは本邦研修そのものが、ともすると、ご褒美旅行、物見遊山と揶揄されることもある。ではそういった研修で研修員は満足するのだろうか？

少なくとも来日した研修員は日本で「何か」を学ぶことを楽しみにしている。しかしながらその「何か」を明確に言葉にして表現できるものはごく少数である。したがって見学に限らず、研修を組み立てる際は、研修員の学びたいことは何か、帰国後の彼らに役立つことは何か、それはどこで、どのように得ることができるかを想像することが大切であると考えます。

多くの研修員にとって日本はあこがれの国である。日本という国に来るだけでも貴重な体験であろう。加えて、大産地、最新の設備、ユニークな取組みをしている団体、それらをただ巡るだけでも「何か」を得ることはできるかもしれない。しかしながらこの場合、何を得るかは研修員次第となり、必ずしも帰国後に役立つ知見を得られるとも限らない。最悪の場合、自国と日本とのギャップを埋めることができず、「役に立たない」という評価を得る恐れすらある。

重要なことは、限られた時間の中で有用な知見・経験を最大限に獲得するために、研修目的やプロジェクトの活動と合致した戦略的な視点をもって研修旅行を作ることである。そして研修員が学びたかった「何か」を具体的に学べたとき、はじめて研修員は満足でき



畳の部屋で日本の普及員にインタビュー



農家の圃場で実際に働きながら、営農について学ぶ。



京都錦市場にて、伝統野菜の販売とマーケティングを学ぶ。

ると考えている。

本邦研修を通して、研修員たちは有形・無形のことを学ぶ。むしろ無形のものの方が大きいかもしれない。例えば、バスや電車が定時運行していることや、ふとしたことで触れ合う機会のある日本人の真面目さや親切さに感動する研修員も多い。特に研修旅行では、研修所では会えない農家さんや農村風景・文化等に触れ、お互いの考え方や行動様式を理解し合うことができる。こうして日本や日本人への理解を深めてもらうこと、つまりは「よき理解者」になってもらうことは、帰国後に共に仕事をするうえで有効に機能する。

研修旅行は研修員にとって、研修期間を通じて最も思い出に残る時間である。そのため、良い見学を終えた後の研修員はすがすがしい満足した顔をしている。また、研修員が高い満足感が得られる見学先では、先方からもよい反応がある。大切な時間を頂いているにも関わらず、「また来てください」といった言葉をいただけることもしばしばであり、年を追うごとに見学内容も洗練されていくような、相互作用さえ得られる。こういった経験をすると研修旅行というのは、計画者、随行者、研修員、見学先の方々、皆で作上げるものであるということを実感する。

また研修旅行をただの「良い経験」に留めるのではなく、そこで得た情報を、自身の知見として定着させていくためには、その後の研修のなかでフォローしていくことが重要である。これは研修員とともに同じものを見て、同じ経験をした者にしかできない業務である。